

尾野山隋風(41)

2021.04.01

琉球使節の江戸上り (5)

琉球使節の災難

郷土史家 西 羽 晃

寛文 11 (1671) 年、琉球使節の一行は江戸からの帰途、8月 26 日に宮宿に泊まり、27 日朝、宮から乗船して桑名へ渡海した。4, 5 里出たところで、暴風雨にあつて琉球人の乗った 3 隻のうち 1 隻のみ桑名へ着いたが、2 隻は知多半島へ流れ着いた。その他 49 隻の内、5 隻が知多半島に、1 隻は勢州若松へ着いた。知多半島へ漂着したのは琉球人 28 人、付添の薩摩藩士 83 人であった。一行は 29 日に宮宿で泊まり、翌日の 9 月 1 日に佐屋宿で昼食してから三里の渡しで桑名へ着いた。

昭和 9 (1934) 年 2 月 4 日付の『朝日新聞』三重版では、この遭難を記録した桑名の文書を、江戸町の郷土史家・水谷長之助が所蔵していたようである。しかし昭和 20 年の桑名空襲で焼失したと思われる。尾張藩の記録では「瑞竜院様御日記」および「柳営日次記」(いずれも『佐屋町史』史料編 1 に所収) に詳しく記録されている。

天保 3 (1832) 年の一行はトラブルが続いた旅であった。6 月 13 日に薩摩に到着したが、正使の豊見城王子朝春が 8 月 27 日 (異説あるが) に薩摩で死去した。そのため讃議官の普天間親雲上朝典が豊見城王子を名乗り、正使となった。9 月 25 日には儀衛正の儀間親雲上蔡修が伏見で死去して、同地の黒寺に葬られた。黒寺は薩摩藩関係の寺であった。讃議官の従者である高原親雲上も亡くなっている。

さらに同年 11 月 4 日に楽師の富山親雲上梁文弼が稲葉宿東町山田藤吉方で病死した。遺骸は棺に入れて鳴海宿まで運ばれて、鳴海の瑞泉寺 (曹洞宗) に葬られた。瑞泉寺には「琉球國 来應院即心是空居士」と刻まれた墓石が現存する。稲葉宿で亡くなり、なぜ鳴海まで運ばれたのか不詳である。『鳴海 瑞泉寺史』には「琉球の人、儒家、楽師、江戸に上る途中、天保 3 年 11 月 4 日、鳴海で 38 歳にて寂す。瑞泉寺に葬る」とあり、鳴海で没したように書いてある。

同年には浦崎親雲上も死去しているらしいが、死亡の場所・日時は不明である。このように多くの死者を出したのは、この年に悪性の風邪が流行ったのが原因かとされている。

ほかの年でも、死者がしばしば出ているが、寛延 2 (1749) 年 1 月 8 日に帰国の途中の浜松で、渡嘉敷親雲上真富が熱病にかかり、同月 12 日宮宿で死去した。享年 40 歳。宮宿海国寺で葬儀され、断夫山北の墓地に葬られたという。

琉球使節は多くの場合は寒い時期に日本本土へ来るため、寒さに弱くて病気になったり、死亡するが多かったようだ。



鳴海瑞泉寺にある琉球人の墓